

御所野遺跡で出土した 縄文時代中期の焼失竪穴住居群

昨年、岩手県一戸町の御所野遺跡で、保存状況の良好な縄文時代中期の焼失竪穴住居址が8棟出土した。竪穴の上部構造を復元しうる縄文時代の焼失住居址はきわめてまれであり、筆者らが実測した住居址DE24住を中心に出土状況を報告し、あわせてその復原案を示してみたい。

環状集落の構造 御所野遺跡は今から4500年ほど前に誕生し、500～600年存続した縄文時代中期後半の大規模な集落遺跡である。集落は標高200mほどの細長い台地(65000㎡)上に営まれている。台地から一段低い西側段丘面にある馬場平遺跡との関係は緊密で、御所野と馬場平は一体化した居住領域として、Ⅰ(円筒上層c式)～Ⅴ(大木9式)期の変遷をとげた。集落はⅢ期(大木8b式)から大きく変化し、墓域中心の環状集落が成立する。二つの環状列石が東西にならぶ墓域は、台地中央部北側の低い平坦面に位置する。この広場＝墓域を中心に、集落内の建物は環状もしくは扇状に配列する。環状列石および墓域群の外周域で、柱穴が80個検出され、少なくとも3棟の掘立柱建物が確認された。これらの掘立柱建物は、いずれも桁行2間×梁間1間である。この掘立柱建物群の外側には、竪穴住居が3地区にわかれて数百棟分布する。

住居群のパターン 馬場平では41棟の竪穴住居がまとめて発掘され、住居群の構成パターンがほぼあきらかに

なっている。竪穴住居は長軸12m以上の大型、一辺3～6mの中型、一辺3m以下の小型に分かれ、Ⅱ～Ⅲ期の段階で、大型住居1棟、中型住居3～4棟、小型住居1～4棟がセットになっていた。ただし、一つの大型住居を核とする住居群は必ずしもすべてが共存したわけではなく、中・小型の建替えは大型よりも頻繁だったろう。これについても、昨夏の御所野西区における発掘(1700㎡)が良好なデータを提供した。発掘された20棟の竪穴住居はⅡ期以降、少なくとも4段階の変遷をとげており、出土土器が同時期で、なおかつ焼失状況の近似するⅤ期(約4000年前)の5棟の建物が同時存在した可能性はきわめて高い。5棟のうちDF22住がやや小振りの大型、DE18住とDE24住が中型、DH28住とDG26-01住が小型に相当する。都出比呂志の用語を借用するならば、1棟の竪穴は「消費単位」、住居群全体は「世帯共同体」と対応する可能性があるだろう。

焼失住居の出土状況 Ⅴ期に共存した5棟の住居址のうち、ここでは中型のDE24住と大型のDF22住をとりあげる。なお、炭化材はいずれもクリである。

DF22住：南北8.2×東西6.8mの南北に長い楕円形平面で、南壁がやや直線的になる。竪穴の深さは60～70cm。南壁に近い位置に石囲炉があり、石囲炉と南壁のあいだの床面を一段低く掘りこんで、両側に石を埋めこむ。竪穴の埋土のうち、黄褐色土を含む褐色土が壁際から大量に流れ込んでおり、周堤と屋根土がそのまま崩壊したも

御所野遺跡DF22住土層断面図 1:125

のと考えられる。ところが、石囲炉の周辺では、屋根の葺き土と推定される土層が径1.5mほど円形に途切れている。天窓の痕跡とみてよかろう。主柱穴は7ヶ所で確認されており、入口は石囲炉にちかい南壁側と推定され、墓域＝広場を指向している。炭化材は堅穴のほぼ全域から出土しているが、なかでも壁の深い南壁から西壁の壁際にかけて、厚さ3～5cmの板状の割材が直立したまま連続し、縦に打ちこんだ杭も内側にやや崩れた状態で残っていた。これらの壁板と側壁の境に、棒状の横材をとどめる部分があり、これは堰板・杭をとめる繋ぎ材か、周堤につきさした垂木を承ける軒桁のどちらかであろう。一方、堅穴中央の床上には、炭化した小枝の破片が面状にひろがる。このもやもやとした炭化物質は、屋根の葺き土層と垂木状の棒材の間にくいこんでおり、土屋根の下地と推定される。このほか梁・桁と推定されるための材が柱穴を結ぶ位置にみとめられる。

DE24住：斜面下にある東壁は削平され残存しない。平面は円形に近く、南北が4.4m、東西は残存部で3.8mの小さめの中型住居である。南壁より石囲炉があり、やはり炉から南壁にかけて幅60～70cmの掘込みをとまう。広場の方位と一致する南壁側に入口を設けたのであろう。堅穴は浅く、最も深い西側でも30cmあまり。屋根の葺き土と推定される埋土の第3層（最下層）は、黒褐色土に白色粘土・褐色土が混入した硬い土で、その下から多量の炭化材が出土した。葺き土の厚さは場所によって異なるが、中央部で10～15cmほどである。炭化材は南～西の壁際でよく残る。中央部で炭化材が少ないのは、天窓の存在により、火が中央に集中した可能性があり、葺き土の上面で確認された焼土層も中央部分が勢いよく焼けて崩落した結果とみなせよう。炭化材のなかで注目されるのは、直立して残存していた4本の柱材（径15cm）である。このほか2ヶ所で主柱穴が確認されており、柱配置は六角形をなす。堅穴の中心にむかって倒れた垂木もしくはサス状の材、あるいは梁・桁状の材も確認できる。

土饅頭形の堅穴住居 建築構造について整理しておく。

①周堤と堰板：周堤そのものはみつからないが、堅穴埋土にその崩壊土らしい土層が確認されている。かりに周堤が存在しないならば、堅穴壁際の外周域で垂木の挿込み痕跡が検出されるはずであり、それが確認されないということは、周堤が存在した傍証となる。DF22住においては、壁際に板状の割材が直立した状態で確認され、DE24住でも同様の状況が確認されている。さらに壁際には、杭状の材や堅穴の壁際にならぶ横材も確認されている。杭状の材で横材をつなぎ、堅穴側壁の堰板となる板状の割材が内側に倒れるのを防いだのだろう。

②軸組と小屋組：大型・中型住居においては、柱は楕円形平面に対応し多角形配列をとる。柱穴の頂部を横架材で繋ぎ、垂木もしくはサス状の材を求心的に配列している。柱上を通る材は垂木よりも太く、隅木的な機能を果たしたと思われる。棟木の有無は不明。

③葺き土と屋根下地：クリの枝を厚く敷いて土屋根の下地としている。この場合、垂木のピッチは草葺きと変わらず密にはならない。

④天窓：DF22住の石囲炉上面において、天窓の痕跡が土層中に確認されたのは画期的なことである。DE24住の焼けかたも、天窓の存在を暗示する。そもそも土葺き住居の場合、屋内の密封性が著しく、煙出し用の天窓を設けないと、そのなかで生活することは不可能であろう。

⑤石囲炉と入口：石囲炉は広場のほうに偏向し、壁と炉の間を一段低く掘りこむ。この掘込み部分は床面の湿気抜きを兼ねた調理場・作業場だったのではないだろうか。この炉端の掘込部分に接して入口を設ける。

以上の考察をもとに、DE24住の復原案を考えてみた。柱や周堤の高さは不明だが、梁を人間の頭にふれない程度の高さでおさめ、土葺きに適当な屋根勾配を想定することによって、おおよそのスケールを把握することが可能だろう。入口と天窓の詳細は不明だが、樺太ニブヒの土葺き堅穴住居の簀子天窓や扉を参考に図示してみた。

（浅川滋男・西山和宏／平城宮跡発掘調査部）